護の為め同地に詰切り居りし遺族及ひ親友の人々附添ひ同日直に駿河台東紅梅町なる氏の遺宅に入り越て二十四日其葬儀を行ひぬ氏臨終遺言して曰く葬儀は極めて質素を旨とせよ親族故旧を限り夜間窃かに行はゝ可なりと依つて同家に於ては氏か葬儀を了る迄は何人に限らす親戚故旧の他には一切公然の通知を為さゝる手筈なりしに訃音は自から都鄙の間に伝はり弔問の客陸続相接し当日会葬者の如き法学院の講師院友其他朝野名士の集まるもの恰も雲の如く無慮千百余名と算せらるゝに至れり炎天如燬の途上車馬の塵を揭けて戛々轟々相踵くもの幾町蓋し此盛大を見るもの是れ唯氏か生前の徳に存し権勢敢て然らしむるにあらさるを知らは氏か人物亦以て推するに足るへし

同三時半染井共同墓地に着するや柩はやかて式場に安置せられ緑陰深処読経の声は忽ち颯々の風に和してこの塵外の天地に起りぬ場中関として人は只暗涙を呑み公情私情皆哀悼追慕に堪へさるに似たり僧侶十三名内に氏か生前の知己峨山和尚あり導師として此日場に臨み氏か為めに引導す曰く

無端超出大千外　薫徹露前一片香
夫惟実相院真性自恃居士

忠肝鉄石　義胆堂々

這箇是居士一生受用底消息矣呼今也臨岐挙揚送行一句去諦聴々々

意気有時添意気　恁麼六月満天霜

嗚呼忠肝鉄石義胆堂々実に氏か一生を貫くもの此知己の僧にして初めて此語有るへく氏又以て冥するに足らんか和尚か引導終

97　高橋健三氏逝く

〔『法学新報』第八九号　明治三十一年八月二十日〕

○高橋健三氏逝く

法学院講師高橋健三氏は小田原に於て宿痾療養中なりしか薬石効なく遂に去月二十二日を以て寓舎に逝けり氏の遺骸は予て看

るや高橋同窓会及ひ法学院々友総代岩波一郎氏の弔文は相続いて霊前に朗読せられそれより再ひ読経声裡に遺族及ひ会葬者の焼香順次に始められ右終つて柩はやかて同家の墓地に埋られこゝに生々しき白木の墓標は立てられぬ蜉蝣の人生とは云へ昨の氏は今や只一片の此墓標あるのみア、此忠肝義胆永く此地下に眠る哀哉夕陽既に斜めに暮色蒼然たる時人漸く散すれは夕風の木立に伝ふ声も自から心あるか如く九腸更に断つの感有り

因に記す当日の弔文は上記同窓会及ひ法学院の他に学士会並に美術学校よりも夫々送り来りしよしにて其他各地の弔電等は殆んと数ふるに遑あらさる程なりしといふ同日岩波一郎氏か法学院々友総代として朗読したる弔文を左に掲く

維明治三十一年七月二十二日元東京法学院講師従四位高橋健三先生南相ノ寓居ニ卒シ越テ二十四日遺命ニ依リ素車樸馬葬ノ儀ヲ東京染井ノ斉場に修ス訃告約ニ従ヘトモ諱ヲ聞テ而シテ来リ会スル者千人先生ト共ニ国ヲ憂フルモノハ即国家ノ為メニ吊シ先生ノ為メニ煦育ノ沢ヲ受クルモノハ皆其慈恩ニ咽フ某等ハ即嘗テ東京法学院ニ学テ而シテ先生ノ示導ト先生ノ徳風トニ浴スル者ナリ今日此儀ニ列ス亦焉ソ思慕追懐シテ其教ト徳トニ嗚咽(嗚)涕泣セサルヲ得ンヤ惟フニ先生ノ吾東京法学院ニ講師トシテ親シク講壇ニ登リシハ自今七八年ノ以前ニ在リ某等其講筵ニ侍ス先生ノ講義必シモ快暢ナルニアラス議論別ニ風生ノ勢アルヲ見ス然レトモ理ヲ解キ義ヲ析ツニ至リテハ細ヲ摧キ微ヲ闡キ聴ク者ヲシテ回ヲ重スルニ従テ其学ノ蘊奥ヲ会得セシメ初メ耳ヲ傾ケサリシモノヲシテ後ニハ膝ノ進ムヲ忘レシム而シテ又其徳風ニ涵染セシニ至リテハ先生ノ状貌固ヨリ魁偉ナルニアラス慈眼故ラニ人ヲ懐柔スルニアラスシテ敢テ視聴ノ間ニ於テ訓育ヲ与フルニアラスト雖モ寔ニ先生ノ清節風塵ヲ脱シ剛稜高簡而モ其曠宇海ノ如クナル知ラス識ラスノ間某等ヲシテ懦気アルニ立チ陋習アルニ泥マサラシム明治二十四年以来先生嘗テ講壇ニ臨マサルモ尚吾学院ノ学生ヲシテ其風ヲ聞テ躍然作振セシムルモノ尠カラス寔ニ先生ノ如キハ人ヲシテ之ヲ教ヘサルニ化シ導カサルニ知ラシムルモノト云フヘシ乃某等ノ先生ヲ師トスル啻ニ之ヲ師トスルノ日ニ師ト為スニアラスシテ之ヲ師ト為サ、ルノ日ニ師トセントスルニ在リ而シテ不幸今日ノ事アルヲ見ル焉ソ傷惋ノ至ニ堪ン然リト雖モ是只某等ノ私情ノミ其国家カ先生ヲ竢ツ所ノモノニ至リテハ立憲ノ政漸ク其備ヲ見ルニ随ヒ益々其要ヲ増シ将ニ大ニ先生ノ力ヲ労セントシテ而シテ今日此事アリ隕星摧天号哭スルモ及フ所ニアラス嗚呼哀哉唯先生訓育スル所ノ子弟皆漸ク其能ヲ暢ヘ先生策劃セシ所ノ経綸漸ク其緒ニ就クヲ以テ之ヲ観レハ則先生ノ百業無窮ニ垂レ徳化悠久ニ存スルモノト謂フヘシ希クハ聊以先生ノ霊ヲ慰ムヘキカ某等自今以往更ニ先生ノ心ヲ体シ踔厲風発以テ涓埃ヲ万一ニ報ント欲ス一郎手腕僂痛ヲ患ヘ進止便ナラス然レトモ追慕ノ余容儀ノ整ハサルヲ顧ミス茲ニ謹テ吊詞ヲ献ム嗚呼白雲縹渺彼蒼ヲ望ミテ訴フルニ所ナシ勁風凄急慘爾トシテ復誄スル所以ヲ知ラス明霊尚クハ只我哀誠ヲ享ケヨ

明治三十一年七月二十四日　東京法学院々友惣代　岩波一郎